

アニメーターの労働は、フリーランサーという雇用形態や低賃金などの特徴から、「やりがい搾取」の一例として議論されることが多い。だが本書は、そうした主張が、実際にアニメーターたちが「どのように働いているのか」を等閑視していると批判する。著者はアニメーターたちがどのように働いているのかを知るために、2017年1月から4月にかけて、週3回程度、計37日間にわたって、東京都内の制作会社X社でフィールドワークをおこなった。

本書は「集まって働く」ことに注目する。アニメーターたちは個人事業主だが、X社と専属スタッフ契約を結ぶことで、X社の職場で一緒に働いている。そこに見られる「集团的・組織的営み」への注目が、本書の大きな特徴である。

たとえば、アニメーターたちの作画機とその周辺スペースは「個人的空間」（「私的空間」ではない）として形成されている。そこでは、仕事とは関係のない映像や音声、テレビやスマートフォンで視聴しながら仕事をしても問題ない。隣席とのあいだには仕切りがあり、隣のアニメーターの手元は見えない。多くのアニメーターがイヤホンを装着して耳を塞いで仕事をする。電話に出る時にも、職場に置かれた複数の電話のうち、できるだけ他の仕事上のアニメーターから離れた位置にある電話を使用するように、それぞれの「個人的空間」に配慮する「独特の緊張」がX社の職場にはある。

だが同時に、職場では「協働を達成する」ことが可能になっている。たとえば、原画作業の経験の浅い者は、先輩から指導を受けることができる。「中台詞」といった専門的な概念を用いて、自らの作業を捉えなおすこともできるようになる。また、必要以上に労力を割いてしまうような仕事の仕方——「カロリー」が高くなる」とそこでは呼ばれる——につ



## アニメーターは どう働いているのか

集まって働くフリーランサーたちの  
労働社会学

松永伸太郎 著

ナカニシヤ出版  
2020年  
A5判, 204頁  
2,800円+税

いて注意される。こうした協働が、同じ空間で働いているからこそ可能になる。

また、職場の間取りも重要である。キッチン側に置かれたテーブルは、休憩や食事を取るスペースとしてデザインされている。そのため、ある人が作業机での手を止めてコップを持ってそちら側に移動すれば、その人が小休止に入ることを意味する。その人に用事のある人は、同じタイミングでキッチン側

に移動して、そこで話し、情報を共有する。また、キッチンやトイレへの動線上に配置された応接室側に置かれたテーブルには、受注依頼の来ている作品の資料が置かれており、通行するアニメーターたちにそれらが自然と目に入りやすい配置になっている。作業机を基点とした個人的空間と、キッチンをはじめとしたそれ以外のスペースが生み出す空間的秩序によって、情報共有や技能学習の機会が確保されているのである。

本書の事例記述の多くは、フィールドノートに収められた

エピソードに依拠している。それらのエピソードは、「職場観察」(p.177)によって得られたものだ。職場観察のために、著者は日中のみならず、真夜中(24時～翌朝5時)の参与観察も11日間にわたっておこなっている。また、あとがきには、職場観察から離れて、X社の花見に同行する機会をもらったことが励みになったことが記されている。この職場観察が可能になったこと自体に、著者の真摯な研究姿勢が映し出されているといえるだろう。

アニメをはじめとした視覚文化については、その内容の解釈を論ずる研究は多い。だが本書のように、作り手の側に立って視覚文化を研究することが、今後はますます重要になるだろう。



佐藤 寧

株式会社日経リサーチ  
世論調査部長

本書はマーケティング・リサーチの「入門書」という位置づけだが、幅広い専門的知見が網羅されているのが特徴である。

「入門」という言葉から、この分野の導入部分を易しく解説していると期待すると、面食らうことになる。例えるなら、本書はマーケティング・リサーチの全体像が示された「地図」のようなもので、初心者向けガイド誌ではない。ハウツー的な小手先の理解ではなく、マーケティング・リサーチの本質や全体像を体系的に知ってもらいたいという筆者の熱意が感じられる一冊である。地図を一度見ただけではその本質を理解するまでには至らないだろうが、マーケティング・リサーチの世界に足を踏み入れる前に、その魅力や奥深さを知ることを目的とするならば、本書はそれに非常に適しており、優れた「入門書」である。

筆者が所属する日経リサーチでは、新入社員に対して本書を課題図書としてレポートを作成してもらっている。本書は、これから歩むことになるマーケティング・リサーチの世界が易しい道りではないと覚悟して、そして、これからの学びを楽しみにしてもらえるきっかけとなっている。

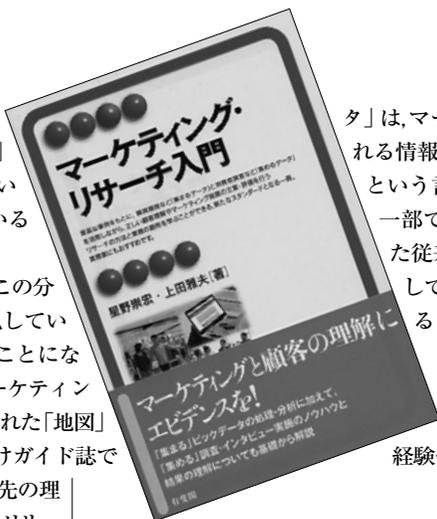
新入社員たちが最も刺激を受けていたポイントは、「集まるデータ」と「集めるデータ」という概念である。旧来から市場調査で用いられてきた定量調査や定性調査などを活用して計画的に取得されたデータを本書では「集めるデータ」と呼んでおり、これに対して業務上発生するログデータなどを「集まるデータ」として、この双方を相互補完的に有効活用することの必要性を解説している。「実態」を正確に掴むことができ、大量のデータをもとに深掘りできる「集まるデータ」と、「理由」や「気持ち」を明らかにして事実を解釈するために役立つ「集めるデータ」は、マーケティング・リサーチで活用される情報の両輪といえる。「ビッグデータ」という言葉が使われるようになって以来、一部では不要になるのではとも言われた従来型市場調査の重要性はむしろ増しているが、本書でその背景を理解することができる。

また、本書は入門者だけでなく、すでにマーケティング・リサーチの業務に取り組んでいる人達が、経験や知見について体系的に理解を深め、専門家としてさらに成長するためにも頼りになる「地図」になる。

本書では、非常に多くの専門的な「用語」が網羅的に紹介されており、それらについては、本文中でわかりやすく太字で記されている。これらの言葉は「索引」でまとめられており、本書を初めて聞いたことばを調べる「辞書」のように活用することもできるし、目次からそれぞれの手法を解説したページをひらき、用いるべき用語を調べる逆引きも可能だ。典型的なものとして、サンプルサイズのことを「サンプル数」と言ってしまうなど、マーケティング・リサーチは言葉の誤用が多くみられる世界だが、専門家として、正しい言葉で説明するのは重要なことであり、本書はそのためにも役立てることができる。

また、数多くの参考文献も紹介されており、学びを深める必要が出てきた時に、自ら探索して知見を広げることができるよう配慮されている。

マーケティング・リサーチの実践に必要な知識はあまりにも幅広く、無計画に経験を積むだけでは、道に迷ってしまうことになり、立ち位置がわからなくなってしまうこともある。マーケティング・リサーチのすべてが体系的に網羅されている本書は、入門者だけでなく、その先輩達にもお勧めしたい一冊である。



## マーケティング・リサーチ 入門

星野崇宏  
上田雅夫

著

有斐閣  
2018年  
四六判, 374頁  
2,500円+税

田辺俊介編著の『日本人は右傾化したのか』(以下、『右傾化』)は、2011年の『外国人へのまなざしと政治意識』(以下、『まなざし』)に続く「チーム田辺」による勁草書房からの成果物刊行の第2弾である。

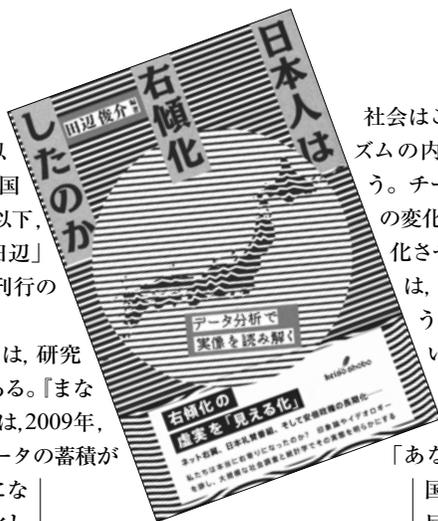
本書を読んだの端的な感想は、研究が深化しているということである。『まなざし』に比べると、『右傾化』では、2009年、2013年、2017年の3箇年分のデータの蓄積があり、時系列的な分析が可能になるとともに、理論自体が複雑化している。同じチームが継続的に研究を進めてきた賜物である。

一例を示そう。田辺は、『まなざし』の第1章において、ナショナリズムの下位概念として愛国主義、排外主義、純化主義という3つの側面があると論じ、それぞれの測定法と、それらの3側面の相関関係、3側面の規定因など、原初的な分析を行っている。『右傾化』では、序章で、3側面のそれぞれをより詳細に分類したうえで、第1章で、3側面の細分化された諸側面の時系列的な変化について分析している。

そして田辺は、2009年から2017年までの変化について、「ナショナリズムの下位概念の関連構造自体が、社会・政治状況に応じて変化」(p.42)してきていると論じるのである。ここでいう「下位概念」とは、文脈から、3側面を細分化した側面のことを指している。概念を細分化したがゆえに第2章では、それらの細分化された側面の間の関係を示すことができた。これは、理論的深化の勝利宣言と言えるだろう。

他の章においても、『まなざし』時代の理論水準(単純な3側面)では歯が立たなかったと思える問題に対して、3側面を細分化したことで結論を導くことができた分析が紹介されている。

しかしながら、いくつかの疑問や論点もある。



## 日本人は 右傾化したのか

データ分析で実像を読み解く

田辺俊介 編著

勁草書房  
2019年  
四六判, 340頁  
3,000円+税

社会はこれからも変化し、ナショナリズムの内容も変化していくことだろう。チーム田辺は、これから先も社会の変化に従って理論をますます複雑化させていくのだろうか? 他方では、理論は簡潔であるべきだという考え方もあり、どこで折り合いが付けられるのだろうか?

もう1点。『まなざし』の時から、排外主義の測定として、「あなたが生活している地域に外国

人が増えることに賛成ですか、反対ですか」と聞き、「外国人」の部分で、中国人、韓国人など、さまざまな国や地域の人に置き換えて尋ねているのだが、これでよいのだろうか? 愛国主義や純化主義については、細分化した概念自体を質問項目に落とし込もうとしているが、なぜ排外主義については、その概念自体を落とし込もうとせず、具体的な国や地域からの人に置き換えた質問にするのだろうか? 田辺は、これを排外主義の「反外国主義」的側面だというのが、その説明は幾分アドホックに感

じられるし、細分類された他の側面は測定されずに残っていることになる。また、現状の「反外国主義」の測定法だと、今後、多国間比較を課題とする場合などには比較可能性の問題が生じるのではないだろうか? 調査の継続性のために同じ聞き方を踏襲するのは理解できるが、別の側面を測定する指標の開発などが必要ではないだろうか?

「日本人は右傾化したのか?」この問題に取り組む本書に対して、上述の疑問や論点を一部として、理論の深化のさせ方、概念の測定法など、「社会と調査」の観点から、さまざまな疑問や論点が現れてくる。チーム田辺以外の読者にも大いに知的刺激を与えてくれる点で、本書は優れて啓発的であることは間違いない。



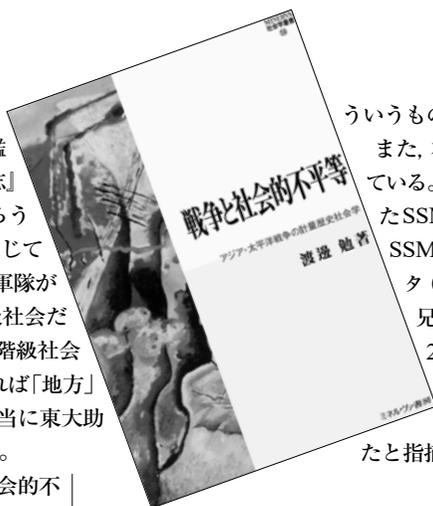
## 片瀬一男

東北学院大学教養学部  
教授

戦争は、子どもの頃から好きだった。戦艦大和の模型を作り、『三国志』に熱中した男子は多いだろう（最近ではゲームらしい）。長じて階層研究を始めると、また軍隊が面白くなった。軍隊は階級社会だからだ。しかも、非日常の階級社会であるから、内務班から見れば「地方」の学歴序列は無化され、本当に東大助教授がひっぱたかれていた。

本書は軍隊や戦争に「社会的不平等」という階層研究の王道を行うテーマを掲げて完遂した労作である。著者は階層研究の華ともいべき職歴研究の技を自家菜籠中のものとし、戦前・戦中・戦後期の政治経済史と重ね合わせて、SSM調査データなどの再分析で駆使している。

たとえばSSM調査における職歴では、これまで兵役は「欠損値」となっていた。それゆえ、徴兵は平等に行われたのかという問いにも、終戦直後、陸軍の指令により各市町村の兵事記録が焼却されたので確たる根拠をもって答えることができなかった。それを本書はSSM調査の職歴データから兵役を抜き出し、前職と比べることで職業別の徴兵率を事後的に計算している。その結果、当時の労働人口の大部分を占めた農業従事者に比べて熟練工の徴兵率が低いことを見出した。農業労働は残された高齢者や女性によっても代替可能だが、戦闘機のエンジンを作る熟練工は代替がきかない。考えてみれば銃後の守りとはそ



ういうものだが、コロンブスの卵である。

また、本書ではデータ上で死者も蘇らせている。死人に口なしで、1955年から始まったSSM調査には答えられないが、65年のSSM調査にある男兄弟の死亡年のデータ（橋本健二「1965年SSM調査家族・兄弟データについて」（研究会配布，2008/12/14））を利用することで、戦時下での死亡リスクにも階層間格差が存在し、死が平等でなかったと指摘する。

## 戦争と社会的不平等

アジア・太平洋戦争の計量歴史社会学

渡邊 勉 著

ミネルヴァ書房  
2020年  
A5判, 352頁  
6,500円+税

この書評の紙幅からして、計11章に上る本書を要約することはしない。むしろ、今後取り組んでもらいたいことを述べる。まず、戦争における不平等の配分メカニズムが理論化されていない。一般に階層研究における不平等は財や資源の配分（もしくはその原理）の不公平、いわば正の財の不公平を言う。これに対して、本書で世代・学歴・職業による徴兵や死の不平等を扱った部分は、負の財の配分にかかわる。正の財の配分なら、相続によるものなら再生産論、獲得によるものなら地位達成モ

デルという理論があった。しかし、負の財の配分については理論がなく、本書での扱いも傾向性の抽出と記述にとどまっている。これらの記述を整理して、何とか負の財（不幸と言い換えてもよい）の配分の不平等に関する理論は作れないものか。それはかつてウェーバーが「苦難の神義論」と呼んだ世界宗教の根本問題に対する社会学の解答となるはずだろう。

本書は、女性で非白人で、サーフィンが特段うまいわけでもないという、何重もの意味でサーフィンの世界において周縁的な立場にある著者が、自らの経験を通して、サーフィン文化とそこに見られるジェンダーを描いたエスノグラフィである。シカゴ学派に魅せられて社会学の世界に入った著者にとって、本書がオートエスノグラフィ／フェミニストエスノグラフィというスタイルを取るようになったのは、著者自身の周縁的な立ち位置からしかサーフィン文化を見ることはできないという、『文化を書く』以降のエスノグラフィに向けられた批判に誠実に向き合うなかで選ばれた、必然的な結果であったように思う。

本書は一度は失ったサーフィンへの情熱を、周囲の女性たちとの関係のなかでもう一度取り戻していくまでの、一人のフェミニストの成長とシスターフッドの形成の物語としても読むことができる。同じ志を持つ女性サーファーたちとの間で紡がれるシスターフッドと、オルタナティブなサーフィン文化への信頼にあふれた後半は、感動的である。

サーフィンという世界のなかで著者が経験するミクロなジェンダーの問題や、それによって引き起こされる著者の内面の感覚は、サーフィンを知らない者にとっても既視感で満たされている。サーフィンをする者にとって、そのコミュニティは、年齢、性別、サーフィンの技術、経験の長さ、サーフィンの道具、美貌、地域性など、さまざまな点で厳密なヒエラルキーを持つ。そうしたなかで、男性サーファーから示される着せがましさ、女性が欲望の対象として矮小化されたり排除されたりすること、女性が少ない社会における女性同士の微妙な関係の記述には、多くの人が思い当たる部分があるだろう。女らしいスタイルのボディボードから、より男ら



## ただ波に乗る = Just Surf

サーフィンのエスノグラフィ

水野英莉 著

晃洋書房  
2020年  
四六判, 204頁  
2,400円+税

しいスタイルのショートボードに乗り換えて以降、女らしい外見にこだわらなくなったという著者の内面の変化にも納得させられる。こうしたミクロな記述こそがエスノグラフィの真骨頂であり、本書も一人の人間に感じられた世界の記述が、それでも普遍的な理解に到達することの、見事な例になっている。これは学術書なのか、自叙伝なのか。そのような疑問も浮かぶ

かもしれない。オートエスノグラフィでは、著者自身の感情や身体感覚を内省的に振り返り、それが生じた文化的・社会的文脈を理解しようとするところこそが研究となる。したがってその文体は、しばしばアカデミックなスタイルをはみ出し、多分に実験的にならざるをえない。本書でも、集団生活のなかで露呈した著者自身の弱さや、著者の恋愛・結婚・就職といったごく私的なこと、そしてサーフィンの世界で周縁的な位置にいる著者が、このスタイルで、サーフィンについて書いてもいいと思え

るまでの葛藤や逡巡についても率直に記述されている。それらを通して感じられる著者自身の人間性こそが、オートエスノグラフィの最大の魅力といってもいいかもしれない。このような点で本書は、日本におけるオートエスノグラフィの金字塔である鶴飼正樹『大衆演劇への旅』につらなる成果として位置づけられるだろう。

好きなサーフィンを続けて本書に結実させた著者の生き方は、趣味の世界を追求しつつ社会学の研究をしている若い人にとっても、ひとつのモデルになるに違いない。本書はエスノグラフィを、そのスタイルも含めて豊饒化させていくのに、間違いなく資するだろう。